

J. M. S. ケアレス著 ● 清水博・大原祐子訳

# 『カナダの歴史』 — 大地・民族・国家 —

(山川出版社・一九七八年)

木村和男

日本でのカナダ史研究は近年漸く大きな発展期を迎えんとしているが、従来その関心は主に資源大国、或いは日系移民移住国としてのカナダといったアラクテイカルな側面に集中する嫌いがあり、カナダという国自体を、またカナダ国民を、その歴史や伝統をふまえたうえで包括的かつ内在的に理解しようとする努力は、残念ながら未だ存外稀薄ではないかと思われる。日本では、或いは欧米でも、不当に見逃されてきたことであるが、カナダ史は我々にとって実に魅力的な分野である。我々はそこに、複数民族と複数文化を包含した壮大かつ苦渋に満ちたコスモポリタン国家建設の推移をみることができようし、またイギリスやアメリカといった超大国の圧倒的影響下で、カナダがいかにして政治的・経済的独立を維持(または喪失)してきたかは、日本にとって無縁の問題ではありえない。さらにイギリスやアメリカの近代史を知るうえで、カナダ史に関する理解が不可欠の一環であることも、改めて認識されてきているのである。

それゆえ、このたびカナダ史学界の泰斗ケアレスの著書『カナダの歴史—大地・民族・国家』(三元〇〇円)が邦訳、出版される意義はまことに大きい。本書はカナダの代表的史家の手になる最も定評あるス

タンタートなカナダ通史であり、外国人読者にとって疑い無く最適の入門書の一つだからである。このことは例えば『カナディアン・ヒストリカル・レビュー』誌が本書を、「学生も一般読者も、このカナダ史入門書に等しく感謝するであろう。本書は明らかな疑問には納得のゆく回答を与える一方、さらに高度の研究への見事な呼びかけになっている」と紹介していることにもうかがえよう。しかも訳者は日本のカナダ史研究におけるパイオニアというべき大原祐子氏であり、この訳業自体がカナダ史を日本に紹介せんとする同氏の熱意の所産でもある。実際、訳文のはしはしに同氏ならではの配慮や識見がうかがえるし、原著に無い附録として収められた同氏による詳細な年表や懇切な文献目録も、これからカナダ史を志す者にとって極めて有益なものである。訳文自体も読みやすく、信頼度の高いものであるが、それを逐一紹介、検討することは、まだ初校ゲラ刷りの形でしか本書を見ていない現在では慎むべきであろう。それゆえ以下では、原著者ケアレスの史学史的立場を、大原氏の「訳書あとがき」とはやや異なった角度から紹介して読者の参考に供したい。

本書を一読して強く印象づけられるのは、若いカナダの歴史はあらゆる困難への果敢な挑戦の歴史であり、これらの困難を克服しての躍進が、過去と同様将来も持続されるであろうことへの、著者のゆるぎない確信であろう。このやや樂觀的なほどの確信は、一種民地からまされない先進国へのカナダの発展を自らの体験として共有した著者の、広くいえば現代カナダ史学界で未だ「主流派」の地

位を占めるローレンシアン学派の描くカナダ史の中に、いわば「通奏低音」として脈打つものである。H. A. イニス、D. G. クレイトン、そしてケアレスというカナダで最も高名な歴史学者の系譜を引くこのローレンシアン学派は、カナダ史の特質を(一)セント・ローレンス河と大陸横断鉄道による東西枢軸を媒介とした西への膨張、(二)貿易、移民、金融面でのイギリスとの結合、(三)隣国アメリカとの対抗、(四)連邦形態下では最大限の中央集権制、の四点に求め、そこにカナダの躍進の基礎があつたと主張したのである(D. G. Creighton, "The Decline and Fall of the Empire of the St. Lawrence," Canadian Historical Association, Report, 1969を参照)。しかるに一九六〇年代のカナダを震撼させた一連の政治的・経済的危機(とりわけ多国籍企業を媒介としたアメリカの露骨な干渉と、ケベック州での独立運動)は、こうした通説を一挙にくつがえすような衝撃を与えた。なぜならこの危機は、ローレンシアン学派による樂觀的カナダ史観の前提たる先の四つの特質の最終的崩壊を象徴するものだったからであり、以後特に若手のカナダ史研究者から深刻なローレンシアン学派批判が提起されるに至った。彼らの批判点は、数量的経済成長論への批判、ケベック州・平原諸州・沿海州といった後進地域史の再評価、さらに個別経営史の重視など多岐にわたるが、最も特徴的なことは現代カナダの危機の根源、即ち先の四つの特質が崩壊し始めた時期を、これまでローレンシアン学派が「最高の繁栄と拡大の時代」とみなしていた第一次大戦直前の

「ナショナル・ポリシー期」に求め、従来の通説とはまっこうから対立する「悲觀的ナショナル・ポリシー論」ともいうべき見解を打ち出した点にあると思われる。しかしながら彼らは、以後精緻で多面的な個別研究を膨大に蓄積しつつあるとはいえ、未だローレンシアン学派の如き総合的カナダ史像を構築するには至っていない。かくてカナダ史学界の「漂流と分裂」は、現在に至るまで止揚されぬままである(これらの詳細については G. Porter, "Recent Trends in Canadian Business and Economic History", Business History Review, Vol. XLVII, No. 2, 1973を参照)。ともあれ本書の読者は、ケアレスとは異なったカナダ史の解釈が、大きな流れになっているという事実を念頭に置いて頂きたいと思う。

最後に、本書によって日本のカナダ史研究が一層発展することを切望してやまない。それは、従来空白であった領域の単なる穴埋めに終つてはなるまい。カナダ史を知ることがどれだけ我々の世界史認識を深く豊富なものにするかが、今後積極的に立証されねばならない。当面、これまでわが国で蓄積されてきた日本史、イギリス史、アメリカ史の研究成果に、我々のカナダ史を緊密に連繫させる事が、一つの重要な課題となるのではあるまいか。(秋田大学講師)

## 刊行案内

○ジョン・セイウエル著、吉田健正訳「近代カナダの歩み」(カナダ大使館発行)。同書をご希望の方は、当大使館広報部へお申込み下さい。

